

タイ・マレーシア国境ジャングル に日本人老兵の消息を尋ねて

渡邊 榮樹 陸自69

1990年1月13日、日本航空JL728便DC10は、バンコク国際空港を定刻の7時30分過ぎに飛び立って約4時間、日本時間13時30分頃、飛行高度約1万1000mで九州上空にさしかかっていた。コックピットの窓からは、千切れ雲の隙間から、灰緑色の陸地が見えた。機長の好意で、コックピットに案内された田中清明さん（熊本県出身、当時77歳）、橋本恵之さん（神奈川県出身、当時71歳）は、操縦席の後ろから、45年ぶりの眼下の日本の陸地を身じるぎもせず、じっと見つめていた。コックピット入口から、二人の年齢を感じさせない、がっしりとした背中を見つめながら、あと1時間余りで成田に到着と順調な飛行にほっとするお二人をバンコクからエスコートしている私であった。

お二人と私との関係の始まりは、前年1989年4月、在タイ外国武官団が、タイ国軍最高司令部の招待により、タイ南部陸海空軍の各基地を視察している最中であつた。一行が、マレー半島を、ちょうど街路樹の深紅の火炎樹

の花や黄色のゴールデンシャワーの花が咲きほこる幹線国道4号線を南下、バンコクから約940kmのタイ南部の最大都市ハジャイのホテルに到着、チェックインした時、フロントでバンコクの日本大使館からの、「大使館に至急電話されたし」のメッセージを受け取った。早速、フロントから大使館政務班に電話すると、「本省からの指示で、日本国内で、タイ・マレーシア国境に反マレーシア政府ゲリラ闘争するマラヤ共産党（CPM）に旧日本軍兵士であった生存者がいるとの報道が出たため、大使館として、その生存の確認を至急調査しなければならなくなつた。たまたま武官団南部地区視察に参加して、ハジャイに到着した武官に、調査を要請したい」とのことであつた。

CPMに現在も日本人兵士がいるということは、初めての情報であつた。タイ・マレーシア国境地帯にCPMが、先の大戦後からマレーシアを植民地としていた英国、次いで独立したマレーシア政府に対して、ゲリラ闘争を継続しており、現在もタイ・マレーシア政府間の懸案事項になっていることは、承知していた。

さっそく武官団の行動計画を確認すると、翌日は、ハジャイ周辺の基地視察であり、幸いにも同じホテルにもう一泊することになっていた。翌日1日、

視察団を一人離脱して国境付近での調査をすることは可能である。ただ国境といつても、アクセスには、西のアンダマン海岸沿い、半島中央沿い及び東のタイランド湾岸沿いと3経路があり、距離にしてハジャイから中央経路が約290kmと最も遠い。まずは、視察団長の国軍最高司令部情報部長に直に相談と、ホテル内の団長室をノックした。情報部長に大使館からの指令を説明し、翌日終日の視察団からの離脱の許可を願つた。更にとの経路を国境に向かえば、情報収集の可能性が大きいかと尋ねた。情報部長であるからには、当然国境のCPMの動向は、承知しているはずとの思惑もある。懇意の情報部長は、離脱を黙認するとともに、情報収集には、中央道国道410号線を国境の町ベトングに行けば良いのではないかと、アドバイスしてくれた。

フロントに戻り、ハジャイで最も信頼できるレンタカー会社の紹介を願つた。ホテルから電話連絡をしてもらい、直ぐにレンタカー会社を訪れると、女性のマネージャーが対応してくれた。実は、バンコクでも女性マネージャーの方が男性より信頼でき、しつかりと対応してくれる経験が多く、安心して、ドライバークラウンを依頼した。条件は、翌日早朝から1日の使用、車種はトヨタ・クラウンで、目的地は、国

道410号線を国境の町ベトング及びその周辺、したがってドライバーは、ベトング地域を良く承知しているベテランをお願いしたい旨願った。マネージャーは、トヨタでなくベンツでどうかと逆提案したが、私は日本人だからクラウンが良いと頑張った。タイ国内では、車はよく故障するが、整備する店は限られている。その点トヨタは、当時すでにタイ国内全域に整備網を展開しており、どんな地方の町にいつても、トヨタの看板を見かけた。ベンツは、特に南部地区は、マレーシア産の中古が多く、エンジンだけでなく、足回りにも長距離移動に不安があった。

結局、翌日早朝6時ホテル出発、ベトングまでの往復、ドライバー付きトヨタ・クラウンで契約した。ホテルに帰って、情報部長に、使用するレンタカー会社及び翌日の計画を説明し、黙認を承知していただいた。

翌日6時定刻には、ホテル玄関にクラウンが待っていた。「国道410号線を進み、昼までにはベトングに着きたい」旨、ドライバーに告げ出発した。途中最初にドライバーが言うには、「帰路ヤラ（ハジャイから東150kmの町）に日没までには、戻りたい。なぜなら山中では、山賊に襲われる恐れがある」とのことであった。タイ南部地区は、イスラム分離独立派が多く、決して治

安が良いとは言えない。加えてCPMの武装集団もいる。山賊が出てでも不思議ではない。「努力しよう」と答え、国道をフルスピードで走った。国境に近づくにつれ、山中は、よく整備されたゴム園が多く、華人系と見られる就労者が散見された。

何とか昼前にベトングに到着した。まずは腹ごしらえとドライバーと共に町中の食堂に入った。メニューがなく、店員に「カウパット」とタイ語で注文した。しかし店員は、理解しなかった。発音が悪いのかと、代わってドライバーが再度注文したが、分かっていない。タイ字で紙に書いてもだめ。ひょっとしたらと、「炒飯」と紙に書いたら、奥に持っていて、「分かった」とすぐに熱々の「チャーハン」を出してくれた。「誰が読めたのか」と聞くと、「祖母が読んだ」と答えた。孫の店員は、「中国語は話せても、文字を書けず、読むこともできない」と答えた。華人系が多い古い町だと強く感じた。間違いなくCPMとのつながりのある地域と確信した。炒飯の味はまずまずであった。

食後、まずは国境のタイ側ゲートまで行った。昼時で車両の往来は見られなかった。国境を警備している陸軍部隊が近くに駐屯しているはずと周辺を捜すと、国境に近い国道沿いに小隊長が長の小さな分屯地があった。警備す

る小隊長にCPMの日本人について聞いたが、知らなかった。次は警察署で聞いてみよう、と、ドライバーに小隊長から場所を聞いてもらい訪ねた。教えられた警察署は、国境警備警察署であった。署内に入っていくと、ちょうど昼食の最中であった。最初はだれが来たのであろうかと警戒の目で見られ

たが、バンコクの日本大使館付武官と身分を明らかにして、訪問の目的を話すと、少し、打ち解けた様子であった。加えて、タイ陸軍大学指揮幕僚課程を卒業しており、同級生で家族ぐるみでの友人であった警察少佐がいたことを述べた。「何期だ」と副署長が、質問した。62期生で、友の名を述べると、ビックリしたように、自分の前任者であり、交代して、バンコクに戻ったばかりのところだと答え、場の雰囲気ガラッと変わり、再度詳細に来訪の目的を聞いてきた。そのあと副署長は席を外したが、間もなく帰ってきて、「今からCPMの関係施設に案内する。しかしながら、ここからの移動間を含め、写真禁止、距離計測もしないでほしい。その条件を守ってくれば、案内できる」と述べた。願ってもない内容で、すぐに承諾した。副署長は、携帯トランシーブを持って、レンタカー・クラウンの助手席に同乗して道案内した。

30分ほどのジャングル内の道は、ジャ

ンプして頭が車の天井にぶつかるほどの悪路であった。日本の悪路を走るとを前提のクラウンを、レンタルしてよかったと、内心思った。

目的の施設は、木造の独立した兵舎のようであった。室内に案内されて、一人のCPMの70歳前後の老メンバーに会った。副署長が言うには、「質問は直接武官からで、時間は30分程度にしてほしい」とのことであった。帰路を考えると、それ以上は無理である。最初にタイ語で、次いで英語で質問したが、理解してもらえなかった。当然でCPMのメンバーは、主力はマレーシア華人系で、言葉は、中国語がマレー語と気が付いた。そこで筆談に切り替えた。高校時代の漢文学習を思い出しながら、最初に「現在、貴官共産党仲間、日本人兵存在有無」と、書くことと理解したよう、領いた。次に「日本人、何名?」、指で2本示した。「両名氏名?」で、首を横に振った。「二人健康?」で頷く。「日本兵活動何?」で、同席の女性がタイ語で「日本の歌を教えてください」と通訳した。「歌の名?」首を横に振って知らないと言った。直ぐに時間は過ぎてしまった。警察署に戻ったのは、16時近くになっていた。

4月の日没は、18時30分頃、お札と挨拶もそこそこに、ベトングを発った。日没と競争で山を下った。何とかヤラ

には、残照がかるうじて残っている19時前に通過したことを記憶している。

ホテルに無事戻ったのは、21時頃、情報部長に視察団復帰の報告と感謝を述べ、その日のうちに大使館へ「国道410号線沿い国境の町ベトング地区において、CPMの元メンバーから、日本人兵士2名の存在を確認した」旨、電話報告した。

大使館としては、日本人兵士2名の生存を確認したものの、すぐに日本へ帰還させることができないものではなかった。CPMは、反マレーシア政府武装集団であり、それまでも、銃撃戦による殺傷・略奪等の不法行為を、

英国からの独立以来継続しており、マレーシア政府として、武装闘争を放棄して、降伏しても、そのまま無罪放免とすることはできない。タイ政府としても武装集団が国境を越境してくれば、不法入国、不法占拠となり、タイ国内での行動を自由に許すことができない。従って日本人2名は、CPMとマレーシア政府及びタイ政府間の和平協定が締結されなければ、晴れて日本へ帰国することができない状況であった。

4月に日本政府が、公式に日本人兵士の生存の確認を公表してから、約8カ月後の1989年12月2日、ハジャイにおいてCPMとマレーシア政府、CPMとタイ政府間の個別の和平協定

が調印された。それまでほとんど姿を現さず、「幻の陳平」と言われていたCPMの陳平書記長も出席したので、大変注目された調印式であった。大使館は、4月以降、タイ外務省及びタイ陸軍と日本人兵士の日本帰還に関して、継続して調整を進めてきた。

翌年1990年1月10日、タイ陸軍のヘリ空輸支援を受けて、ハジャイにおいて日本人兵士2名を大使館側がCPM側から正式に引き取り、記者会見の後、お二人は翌11日民間航空機でバンコクへ移動、健康チェックのため、バンコクジェネラル病院に1泊入院した。

13日、バンコク国際空港から日本へ出国した。機中は、武官が同行エスコ



トすることになり、成田空港において、降機時、車椅子に座っていただき、お二人を出迎えていた厚生省の職員に異状なく引き渡した。

生存確認の前年4月から、機中同行まで、直接の接触の機会は、少なかつたものの、平成最後の戦地からの生還者二人は、CPMの中でも将校としての扱いを受け、途中、中国人としてのパスポートを使えば、日本へ帰国できるとの配慮を辞退して、今回の帰国まで、日本人としての誇りを失わない気骨ある軍人であった。

田中さんは、2000年に、橋本さんは、1997年にご逝去されており

ます。また陳平書記長は、2013年、郷里マレーシアアベラ州に帰郷を許されることなく、バンコクにて享年90歳で客死しております。合掌。

写真は、1990年1月13日、JL728便DC10機内で日本食を喫食中に撮影したもので、窓側から橋本さん、田中さん、右端が筆者渡邊である。

【参考資料】

- ・「マラーヤの武装闘争に加わった日本人」(アジア太平洋研究センター) 原不二夫
- ・「マラーヤ共産党書記長陳平の死」日本マレーシア学会(2013) 東條哲郎

お墓に関する ご相談承ります

- ①霊園・寺院のご紹介
- ②お墓の引越し(改葬)
今、話題です。地方から首都圏へ
- ③お墓のリフォームなど

会員の皆様には
割引特典
がご用意されています。



※但し、割引が適用できない場合もございます。
ご相談は無料です。まずはお気軽にご連絡ください。

創業明治38年
霊園・墓石の **須藤石材**
— 首都圏・京都・大阪・名古屋・金沢・福岡・札幌 —

0120-053-827

〒171-0014 東京都豊島区池袋2-3-1(須藤ビル)
TEL: 03-3982-3333(代) FAX: 03-3982-1126
Web: <http://www.sudo-sekizai.co.jp/> **業界No.1**